街路環境整備事業の計画策定段階における協議過程の可視化方法に関する研究

韓国の大邱市東城路公共デザイン改善事業を事例として

A METHOD FOR THE VISUALIZATION OF THE DELIBERATIVE PROCESS IN
URBAN ENVIRONMENT IMPROVEMENT PROJECT

Focused on the Dongseong-ro public design improvement project in Dae-gu, Korea

全 ソンイ*

Songyi JEON

The present study develops a new methodology to visualize the interactions between stakeholders during consensus building processes. The research takes as an example the urban environment improvement master plan consultation process for a commercial street in Dongseong-ro, Dae-gu city, Korea.

As a result, the following points were clarified:

1. For some topics, the plan was changed after modifications were requested.
2. Prior to changes in the Mater Plan, Master Architect(MA) made the main proposal. Then, after the main modifications, adjustments were made.
3. In order to support the consensus process, it is important that Government and the Promotion Committee understand the diverse issues, and that countermeasures are request to the MA.

Keywords : *Dongseong-ro Public Design Improvement Project, Planning Process, Debate, Coordination, Consensus Building*

東城路公共デザイン改善事業, 計画策定過程, 討議, 調整, 合意形成

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

今日、日本と同様に韓国においても既成市街地の衰退を克服するために、街路環境改善を通じて公共性と快適性を創出し、都市の活性化を図る都市再生事業が推進されている^{注1)}。しかし公共街路事業には多様な主体の利害関係が絡んでおり、これによって異なる価値観を持つ利害関係者の葛藤が避けられない。このことから、計画の策定段階から多様な主体が参加し、意見交換することができる協議の場を設けて、十分な討議が行われること、さらに個別テーマの調整過程と、その討議過程で得られた結果を意思決定に結びつけることが必要である¹⁾。また、このような討議の過程において、参加主体間にどのような葛藤があったのか、どのような要素で合意形成に至ったのかを可視化し、共有することは、今後の都市再生事業で発生する問題を事前に認知し、解決することが期待される。

本研究では以上を踏まえて、推進委員会の代表者による討議に基づく街路環境整備事業の成功事例である韓国の東城路公共デザイン改善事業を分析対象として、街路環境整備事業のマスタープラン^{注2)}の策定段階においてどのような意見調整の過程を経て、合意形成

に至ったのかを、会議録に基づいた質的分析法により可視化する方法を開発し、その協議過程を明らかにすることを目的とする。

1-2. 既往研究と本稿の位置づけ

合意形成の過程を分析する資料として事業の会議録に基づいた既往研究には、マスターアーキテクト方式のキャンパスデザインにおいて、マスターアーキテクトとブロックアーキテクトが環境設計プロセスを展開する際に発生したデザインに対する意見の相違解決をモデル化し、合意形成手法を提示した北尾²⁾、民間企業が主導する都市再開発事業の計画決定段階における関係者間の応答構造を分析し、官民の合意形成のプロセスを示した服部の研究³⁾、まちづくり小集団の会議から構成員の発言のターン(発話の単位)に着目し、その割合の変化点をシーケンスの区切りとして使用した島田の研究⁴⁾などが、事業の会議録による協議の内容を扱っている。

それらの研究はプロセスの中で参加主体間の対応関係を合意形成の手法として扱っているが、街路環境改善事業の参加主体間による議論の変化プロセスを表現する方法は開発されていない。

本研究はマスターアーキテクト(Master Architect、以下 MA)と推進委員会の代表者による韓国の街路環境整備事業を事例とし、マス

* 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 博士課程

Doctoral Course, Grad. Student, Dept. of Architecture, Faculty of Science and Eng., Waseda Univ.

タープランの策定段階における協議過程をダイアグラムに示すことで、マスタープランの策定過程を体験でき、街路整備事業の関係者に参考資料として共有することができる点で意義がある。

2. 研究対象と方法

2-1. 研究対象の概要

(1) 事業の概要

東城路公共デザイン改善事業は、文化体育観光部(韓国の中央行政署)の公共デザインモデル事業及び街路環境改善事業の一環として進行され、文化体育観光部が国費の支援と事業全般の企画・調整を行った。且つ、地域住民が参加する公共デザインを通じて、地域のアイデンティティと歴史性を反映する都市再生のモデルを提示し、地域文化の活性化を図ることを目的としている⁵⁾。

その中で東城路公共デザイン改善事業は、2007年7月に始まり、2010年12月に竣工され、専門家と公務員、市民代表と住民代表で構成する推進委員会と、デザインを担当するMA、実務委員会³⁾によって実行した、初の公共デザイン改善事業である⁴⁾⁶⁾。

事業対象地の東城路は、大邱広域市の中区に位置し、大邱ウプソン(邑城)を崩して作られた道路の東の部分で、長い間大邱の商圈の中心だった歩行者専用道路の中心商業街である。そこで行われた東城路公共デザイン改善事業は昔の大邱城壁の跡を通じて、歴史的なアイデンティティを回復するデザインを主な概念とし、市民の歩行権確保(邑城街の連結)、周辺領域との相互連携を通じたマスタープランの戦略を樹立した⁷⁾。

図1 事業範囲⁵⁾

(2) 事業の参加主体と体制

利害関係者の意見の収斂と合意を導き出すための意思決定機構である推進委員会は、行政の一方的な構成ではなく、地域の専門家と市民団体の代表が行政に提案した推進委員会の構成案に基づいて組織された。事業の参加主体は図2に示すように、①行政支援推進団、②推進委員会、③MA、④設計チーム、⑤民間協議会、⑥主管団体(東城路公共デザイン事務局)に区分される。

詳しく見ると、①行政支援推進団は、文化体育観光部、大邱市、中区庁で構成されており、行政機関内の支援体制を構築し、事業の企画・調整、予算確保及び支援、推進委員会の構成、関係機関との協議や交流を担当した。②推進委員会は専門家、公務員⁶⁾、市民代表、住民代表(商店経営者)で構成されており、事業推進の全過程の意思決定機関として、MAの選定、マスタープランの承認、事業の細部事項を樹立する機能を果たした。③MAはデザインの概念を提示し、推進委員会と協議してマスタープランを計画した。また、④設計チームは空間、造景、デザイン、施設物分野の地域専門家で構成され、MAと協力してマスタープランの細部計画及び実施設計を行った。⑤民間協議会は商店街の住民代表、専門家、文化団体、市

民団体で構成され、事業推進の諮問及び意見を受け入れるように組織された。⑥東城路公共デザインの事務局は、韓国建築家協会の大邱支部が主催団体として選定され、事業と予算計画の作成、細部執行や運営、結果報告と会計報告を引き受けた⁸⁾。

本論文では、行政支援推進団、推進委員、MAが揃って協議を進めた推進委員会の会議を基に、マスタープランの策定段階における協議過程を分析する。

図2 東城路公共デザイン改善事業の組織図⁷⁾

2-2. 研究の方法

本研究は推進委員会の会議録⁸⁾を基に、マスタープランの策定段階における、協議主体間の意見調整の過程を可視化する方法を提示し、ダイアグラムによる協議過程を解明するために、以下のように行う(図3)。

第一に、2007年7月26日から2009年4月3日までの全15回にわたって実施された東城路公共デザイン改善事業の進行過程や推進委員会の討議内容を基に、マスタープランの策定段階を区分し、その段階別に特徴を把握する(3章)。

第二に、推進委員会の会議録から、調整の対象となる設計内容と項目、調整行為を抽出し、参加主体間でどのようなやりとりがあったかを質的分析法による焦点的コーディングにより明らかにする。これらを基に協議内容の可視化する方法を提案する(4章)。

第三に、上記の方法を用いて、マスタープランの策定に向けた意見調整の推移を可視化する。さらに、設計対象による議論展開の過程を模式化し、意思決定のための主体間の関係特性を明らかにする(5章)。

3. マスタープランの策定までの過程

本章では、図4のように、東城路公共デザイン改善事業のマスタープランの策定までの進行過程及び推進委員会の討議内容に基づき、マスタープランの策定段階を区分し、その特徴を記述する⁹⁾。

3-1. 第1段階(整備事業の構想)

MAと事業の全般に関する協議が行われ、整備事業を構想する段階で、推進委員会の会議の第1回から第6回までが該当する。

まず円滑な事業推進のための推進委員会を組織し、主管団体を選定した。また、行政と推進委員会が協議してMAを選定し、事業計

図3 研究のフロー

画書及び予算案を検討した。その後、推進委員会で事業計画及び予算案を確定し、MAと事業全般に関連する協議を進めた。計画素案報告会では、MAが作業の方針やデザインの基本コンセプトを紹介し、中間報告会では関連専門分野の推進委員らの意見を収斂し、マスタープランの概念を提示し、調整した。

3-2. 第2段階(マスタープラン検討及び一部の承認)

マスタープランの細部事項に関して論議が進められ、その計画内容が承認された段階で、第7回から第9回の推進委員会の会議までが該当する。

特にこの段階では、マスタープラン公共デザイン TF(Taskforce Team)協議会と関連部署の実務会議を開催し、マスタープランの細部項目に対する効果的な実現に向けて関連機関の専門家らの協議が

行われ、施工上の問題点を把握した。また、市場報告会を開催し、関連機関や東城路の商人、市民が事業の現況を共有する場を設けた。

推進委員会では、事業参加主体の現場調査やマスタープランの細部事項に関する議論が行われ、この過程で、事業の日程や予算の一部が変更された。そして最終報告会を経て、マスタープランの一部が承認された。

3-3. 第3段階(マスタープラン変更及び承認)

マスタープランの一部に変更事項があって、再論議した段階で、第10回から第12回の推進委員会の会議までがここに該当する。

この段階では、マスタープランの変更事項及び設計の細部事項に関する議論が行われ、マスタープランが最終的に承認された。一方、市議会では緑化委員会が開催され、樹種に関する議論があり、横断歩道の懇談会が行われ、市民の歩行権に関する論議が進められた。その後推進委員会で、樹種の選定と横断歩道の設置に対する議論が再び重点的に行われた。このような過程を経て、マスタープランの実施設計の内容がまとまった時期である。

3-4. 第4段階(マスタープラン完成)

最後にマスタープランを検討し、設計をまとめた段階で、第13回から第15回の推進委員会の会議までが該当する。

実施設計が最終的に決まり、1次区間の工事が開始された。また、マスタープランの成果を報告する展示会と討論会が開催された。この時期の推進委員会では、事業後の管理のための運営委員会が提案され、追加工事に関する協力要請や現場で発生した問題に対して解決策を議論した。

3-5. 小結

第1段階では、MAがデザインの概念を提示し、各設計対象に対して協議が行われた。第2段階では、MAのデザインに関する検討が行われ、マスタープランが承認されたが、第3段階でマスタープランの変更要請があり、推進委員会は問題要因を把握し、計画変更に対応した。第4段階は推進委員会から最終的に意見が収斂され、設計案がまとまった。

図4 マスタープランの進行過程^{注10)}

4. 協議内容の可視化

本章では東城路公共デザイン改善事業の推進委員会の協議内容に基づき、計画の策定までの全 15 回の推進委員会の会議のうち設計案を協議した第 4 回、第 6 回、第 7 回、第 8 回、第 9 回、第 10 回、第 11 回、第 12 回、第 15 回の協議内容に関する参加主体間の意見調整の推移を可視化する方法を提案する。

4-1. 質的データ分析による会議録のコーディング

本研究は、東城路公共デザイン改善事業の推進委員会の会議録を質的データとして活用し、マスタープラン策定に向けて誰が誰に対して話をし、その協議内容は何かを分析するために、質的データ分析法^{注 11)}によるコーディングを行った(図 5)。

会議録のコーディングは、オリジナル文書の全体的な文脈による設計内容に関する発言で区切り、セグメントの要約は文章セグメントから一行ごとのコーディングを行う。それを基に誰が誰に対してどのような事を言っているのかを分類する。また、その話がどのようなテーマについて述べられているのかをセグメント要約内容からコードとして抽出し、一つのデータとして構成した⁹⁾。

コード 1 はセグメントの要約により設計対象となる要素を表し、コード 2 は協議の事項になる調整の課題を含んでいる。その内容を表 2 のキーワードに当て、それに対応する調整項目として判断する。さらに、発言や行為の背景に、どのような意図があるかを表 3 の行為の内容を基に調整行為に区分した。

文書セグメント					セグメントの要約				
〈公務員の発言内容の原文〉 高強度合成木材デッキに対する問題は MAと中区の担当部署間にまだ解消で きなかったようだ。特に、合成木材を 使用したときの排水などが問題だ。					→	・高強度合成木材デッキの排水が問題だ。			
〈MAの発言内容の原文〉 事業をしながら最も優先的に成就すべ き目標は、東城路だけの色を探さなけ ればならない。それで見つけたのが合 成木材デッキだ。					→	・東城路のアイデンティティと合成木材 の関連性。			
								↓	
順番	日付	先行 話者	調整 方向	後続 話者	調整 行為	項目及び要約内容			回数
						コード1	コード2	要約内容	
253	2008 0229	公務員	▷	-	問題 指摘	合成木材	合成木材 デッキの 排水	合成木材デッキの排水 が問題だ。	7回
省略									
256	2008 0229	-	◁	MA	説明	合成木材	舗装材料 選定	東城路のアイデンティ ティと合成木材の関連 性。	7回

図 5 歩道舗装に関するコーディングの例

4-2. 街路整備の設計対象

ここでどのような設計対象を中心に協議が進行したかを分析するために、まず東城路公共デザイン改善事業の報告書により分野別の設計内容を踏まえて、基本分類を行った。また、その区分に含まれる設計要素は会議録のコーディングのセグメントの要約から構成要素を抽出し、本論での分類に整理した。それを基に、協議の対象となる項目は、「歩道舗装」、「横断歩道」、「露店」、「広場」、「建築物」、「街路樹」、「サイン」、「施設物」に分ける(表 1)。

4-3. 調整項目の区分

各会議で話し合った主な調整の内容を分析するために、調整項目の分類を行なった(表 2)。推進委員会の会議で、MA が提案した設

計案の内容を基に、会議録のセグメント要約から調整内容に該当するキーワードを抽出し、これを性格別に区分し、名称を付けた。調整項目は「コンセプト」、「空間構成」、「デザイン」、「材料」、「構造・性能」の 5 つに分類した。^{注 12) 10) 11)}。

表 1 設計対象の分類^{注 13)}

分類	本論での分類	設計要素
歩道舗装計画	歩道舗装	舗装材(合成木材、長臺石)、平面線形、幅員構成
空間計画	横断歩道	国債報償路の横断歩道*(韓一劇場前、図 1 の位置を参考)
	露店	露店撤去
	広場	東城路マダダン、新東将台マダダン、北将台マダダン
	建築物	北将台マダダン舞台*、新東将台タワー*、街博物館*
造園計画	街路樹	植栽、植栽形式、植栽樹類
サイン計画	サイン	案内サイン、標識サイン
施設物計画	施設物	ごみ箱、ベンチ、街灯、照明、噴水*、

*は実行されてない設計内容。

表 2 調整項目の区分

調整項目	定義	キーワード
①コンセプト	事業の内容と目的、実現方法や形態、イメージの概念に対する考えや見解	東城路のアイデンティティ、東城路だけの、東城路の歴史性、ウブソン(邑城)街の象徴、城壁の跡を連結(横断歩道の実行)、街路の活性化のために、公営露店
②空間構成	空間を構成する点、線、面などの造形的な要素と位置、範囲、空間計画に関する内容	露店の撤去、広場位置、広場の追加造成、横断歩道の設置、新東将台タワーの建立、施設物設置、植栽(位置)、サイン設置
③デザイン	幅、高さ、大きさや形態に関する意匠表現及び色の表現で現れる特性	広場デザイン、舗装デザイン、植栽樹種選定、植栽形式、標識デザイン、夜間照明の計画、施設物デザイン、サイン計画
④材料	舗装材の種類、材料の表面性質、仕上げなどを示す内容	舗装材料(合成木材、長臺石)、舗装仕上げ
⑤構造・性能	機能に対する能力の程度で、構造、強度、排水のような技術的な内容	強度および耐久性、合成木材デッキの排水、合成木材デッキの構造、安全性、舗装施工法、排水工法

4-4. 調整行為の 9 種類

まず、協議内容に対する参加主体間の調整行為を分析するために、既往研究で示されている調整行為の項目を捉えた。

北尾(1998)は調整内容に対する MA の調整行為を「肯定評価」、「否定評価」、「設計目標の提示」、「設計内容の提示」、「設計の実施方法の提示」、「設計の参考情報の提示」、「意向を確認する」に分けた。また、服部(2012)は会議において当事者が相手方に対して「説明」、「依頼」、「提案」を行う行為を主体的行為として判断した。

以上を踏まえて、調整行為を大きく同意、反対、提議、確認に区分し、コーディングのセグメント要約内容からその行為と関連するキーワード表現を分類し、表 3 のように分けた。詳細に見ると、9 つの種類に分けられ「同意」、「反対」、「問題指摘」、「提案」、「助言」、「説明」、「要請」、「質問」、「意図確認」に区分した。

4-5. 協議内容の可視化方法

本論では、マスタープランの策定までの協議プロセスを分析するために、設計対象別に協議内容を可視化する方法を提案する。

それぞれの設計対象がどのような主体によって、意見の調整を経て、合意に至ったのかを示すために、調整の方向を持つ対人調整行

表 3 調整行為の種類^{注 14)}

既往研究の分類			調整行為	定義	行為の内容	キープレーズでの表現例
北尾 (1998)	評価	肯定評価	④同意	設計案や設計内容の提示に同意あるいは支持する。	提示された設計案に良い、正しいと判断	「～に賛成する」 「～に妥当」
		否定評価				
	提示	設計目標提示	⑤反対	提示された設計案に拒否や、相異なる設計の代案を提示する。	・設計案に拒否意思を表示 ・相反する設計内容を提示	「～に反対する」 「～は不適切だ」
		設計内容提示				
		設計参考情報提示				
		設計実施方法提示				
服部 (2012)	確認	意向を確認する	⑥助言	設計に参考になる情報や、具体的な実行方法を提示する。	・設計、実行手法のアドバイス	「～が可能だ」 「～を進める」
	依頼		⑦説明	設計に関する内容を理解させ、従うようにする。	・設計内容説明 ・現状説明 ・立場説明	「～を説明する」 「～する予定だ」 「～の状況だ」
	提案		⑧要請	必要な設計や実施のための行動を求める。	・デザインの要請 ・代案の要請 ・支援の要請	「～に表現してください」 「～の代案が必要」 「～の協力要請」
	確認		⑨質問	設計内容や問題に対して確認する。	・問題質問 ・設計内容質問 ・設計情報質問	「～の問題に関する質問」 「～に関する質問」 「～の進行質疑」
	提案		⑩意図確認	相手が意図する計画や調整の内容を確認する。	・設計の調整内容を再確認 ・事業の目的を確認 ・志向する計画を確認 ・必要な検討事項確認 ・議決した計画内容を認定	「～の必要性再確認」 「～を認識する」 「～は理解する」 「～を認定する」 「～決定する」

為に基づいて、先行話者と後続話者間の調整行為とその方向を可視化し、協議プロセスを説明できる一つの仕組みを提供する¹²⁾。

まず、会議録の文章セグメント要約内容により、設計対象別に先行話者と後続話者の発言内容を談話セグメント^{注 15)13)}に区分し、先行話者と後続話者を記号で表示した。さらに、先行話者と後続話者の間に発意を示す直線を描き、調整の方向を矢印で示し、その調整行為を矢印の上に記号で示した。これにより設計対象による意見調整の推移を可視化することができる。

その後、可視化した意見調整の推移を基に、各計画内容の討議毎に集約して模式化を行った。MA を中心に円を描き、その線上には推進委員を、点線の四角には行政を置いた。そして、発言者を把握し、発言がない参加者はダイアグラムから除いて、参加主体間の調整行為とその対応方向を矢印で表した。矢印は調整行為の種類を基に大きく同意、反対、提示、確認に区分し、矢印の方向は先行話者に対する後続話者の調整の方向を基準として討議の模式化を行った。

4-6. 小結

事業の会議録を基に、各設計対象に関する先行話者と後続話者の発言内容により調整行為とその方向を可視化し、このような協議内容を集約した上で、討議の模式化ができた。

5. マスタープランの策定に向けた合意形成プロセス

5-1. マスタープランの策定段階における意見調整の推移

図 7 は、マスタープランの策定に向けた各会議の協議内容を先行話者に対して後続話者がどのように調整を行ったかを可視化し、これを用いて意見調整の推移を分析する。

意見調整の全体を調べると、推進委員会の会議 9 回のうち、設計の調整に関する討議が 28 件、発意が 368 件であった。その中で、第 2 段階のマスタープラン検討及び承認段階は約 39.9%と最も発意が集中しており、第 3 段階のマスタープラン変更及び承認は、約 34.2%、第 1 段階の整備事業構想は 19.8%、第 4 段階のマスタープ

【会議録のコーディング】

順番	日付	先行話者	調整方向	後続話者	調整行為	項目及び要約内容	回数
174	2007 1226	MA	▷	—	提案	歩道 舗装 デザイン	6回
198	2007 1226	—	◁	専門家	要請	歩道 舗装 デザイン	6回

【協議内容の可視化】

段階	会議開催日	先行話者の発言	調整行為と方向	後続話者の発言
第 1 段階	2007年 12月26日 6回会議	▽長葦石④で邑城街を表現。 合成木材は自然親和的で快適な歩行環境造成④のため、デザイン及び材料。(MA) ▽④材料に対して技術的、費用的に検証。(MA)		▽邑城街に対して⑧多様に表現。舗装材の③技術的な問題(専門家) ▽合成木材の材質上に⑥問題質問。(市民) ▽歩行中心の仕上げを⑧検討してください。(商人) ▽舗装材選定はデザイン的な側面と管理的な⑧側面を考慮してください。(行政)

【討議の模式化】

推進委員会の参加者	記号	【協議の集約】
総監督	M A	
専門家	推進委員長 建築 造園 環境 造形 看板	
推進委員	公務員	
	文化体育観光部	
	大邱広域市	
	大邱市中区	
行政	市民	
	市民団体代表	
	商店街繁栄会	
	文化体育観光部	

図 6 協議内容の可視化方法^{注 16)}

ランの完成は 6.5%であった^{注17)}。

・第1段階：整備事業の構想

第1段階の整備事業構想では、推進委員会の会議2回の中で8件の討議が行われ、73件の発意があった。④コンセプト(4件)、⑧空間構成(2件)、⑩デザイン(4件)、⑪材料(1件)に関する討議が行われた。主にコンセプトとデザインに対して意見を調整した。この段階では、各討議の中で、MAの発議開始が6件と最も多く、公務員によるものが2件であった。

談話セグメントで見ると、73件の発意のうち、露店に関する発意が26件と最多で、そのうち専門家(27件)とMA(18件)を中心に意見調整が行われた。また、調整行為を見ると、④提案(24件)と①説明(14件)、⑩問題指摘(11件)を中心に協議が進められた。

・第2段階：マスタープラン検討及び一部の承認

第2段階のマスタープラン検討及び一部の承認段階では、推進委員会の会議3回の中で10件の討議が行われ、147件の発意があった。⑧空間構成(5件)、⑩デザイン(3件)、⑪材料(3件)、⑨構造・性能(2件)について討議が行われ、大部分の計画において、空間構成に関する議論が行われた。この段階では、MAの発議開始が4件、専門家や公務員によるものが2件、その他商人、行政で各1件であった。

147件の発意のうち歩道舗装に関する発意が66件と最も多く、そのうち専門家(45件)、MA(32件)、公務員(31件)、を中心に協議が行われた。主に①説明(42件)、④提案(38件)、⑩問題提起(16件)による調整行為を通じて協議が行われた。

・第3段階：マスタープラン変更及び承認

第3段階のマスタープランの変更及び承認段階では、推進委員会の会議3回の中で8件の討議が行われ、126件の発意があった。⑧空間構成(3件)、⑩デザイン(4件)、⑪材料(1件)に対する協議が行われ、デザインに関する意見調整が主となった。この段階では公務員の発議が3件、専門家によるものが2件、行政は2件、商人は1件であった。

126件の発意のうち、横断歩道に関する発意が67件で最も多く、そのうち専門家(53件)、公務員(18件)、市民(17件)を中心に協議が行われた。調整行為は④提案(50件)、①説明(35件)、⑩問題指摘(9件)、⑨助言(9件)であった。

・第4段階：マスタープランの完成

第4段階のマスタープランの完成段階では、推進委員会の会議1回の中で施設物とサインの⑧空間構成の討議が行われ、24件の発意があった。専門家による発議開始が2件で、そのうち、公務員の発意が7件、専門家や市民の発意が6件で、④提案(9件)、①説明(6件)、④同意(4件)による調整行為を中心に協議が行われた。

5-2. 協議類型の定義

図8は、各設計対象の協議内容を集約した模式化を通じて、マスタープランの策定までの議論展開過程を示している。また、マスタープランの策定に向けた意見調整の推移(図7)を踏まえ、発議者と協議の主体、その調整の方向に着目し、協議の類型化を行い、討議の模式化をその類型別に分類した。各討議の発議者はX.MA、Y.推進委員、Z.行政の3つに分類し、それらの発議開始から、他の協議主体(x.MA、y.推進委員、z.行政)との調整の型を大きくMAの発議に対する協議、推進委員の発議に対する協議、行政の発議に対する協議に区分され、全8つのタイプに類型化することが出来る。

(1) MAの発議に対する協議

Xy. MA中心型(7件)

MAの発議に対して、推進委員がMAに意見を提示し、MAと意見を交換するタイプである。図8において、真ん中にあるMAに対して円側の推進委員から矢印が向いている。

Xyz. MA媒介型(4件)

MAの発議開始で協議が行われ、MAが推進委員と行政の間で意見を受け入れて確認するタイプである。図8において、MAに対して円上の推進委員と外側の四角に置かれた行政が、意見の提示とやり取りを行われている。

(2) 推進委員の発議に対する協議

Yxz. 推進委員媒介型(2件)

推進委員の発議開始で協議が行われ、推進委員がMAと行政との間で意見を受け入れ、やり取りするタイプである。図8において、円上の公務員を中心に矢印が向いていて、円上の専門家と公務員が真ん中のMA、外側の行政とやり取りを行われている。

Yx. 推進委員、MA調整型(3件)

推進委員の発議開始で協議が行われ、推進委員がMAに意見を提示し、MAがこれに対応するタイプである。図8において、円上の専門家と公務員が真ん中にあるMAと意見を交換し、真ん中のMAと円上の公務員が専門家に向いて意見を提示している。

Yz. 推進委員、行政調整型(9件)

推進委員の発議開始で協議が行われ、推進委員に対して行政が意見を提示し、推進委員の間に意見を提示し、やり取りするタイプである。図8において、円上の公務員を中心に矢印が集まり、提示されるもの、または円上の専門家に矢印が集まっている。

Y. 推進委員内部の調整型(2件)

推進委員の発議に対して、推進委員同士で意見を提示し、やり取りするタイプである。図8において、円上の推進委員の内部で、公務員に対して、専門家と市民が調整を行っている。

(3) 行政の発議に対する協議

Zx. 行政中心型(1件)

行政の発議に対して、MAが意見を提示して対応するタイプである。図8において、外側にある行政に対して真ん中にあるMAが意見を提示している。

Zy. 行政、推進委員調整型(2件)

行政の発議に対して、推進委員が意見を提示し、行政と意見を交換するタイプである。図8において、円上の専門家を中心に意見が集まって、専門家と外側にある行政が意見を交換している。

5-3. マスタープランの策定に向けた議論の展開過程

次に、マスタープランの策定に向けた議論の展開過程をマスタープランの段階と協議の類型によって分析する。

まず、第1段階の整備事業構想段階では、4回の露店に関して、推進委員の発議に対するYz.推進委員・行政調整型で協議が行われた(1件)。続いて、6回の会議では、7件の討議のうち、MAの発議に対するXyz.MA媒介型の協議が、露店、歩道舗装であった(2件)。また、Xy.MA中心型の協議が、広場、施設物、サインで行われた(4件)。一方、推進委員の発議の開始で、Yxz.推進委員媒介型の協議が、横断歩道において行われた(1件)。

図7 マスタープランの策定に向けた意見調整の推移

次に、第2段階のマスタープラン検討及び一部の承認段階では、7回の会議で2件の討議があり、歩道において推進委員の発議によるYxz.推進委員媒介型の協議が行われ、街路樹に関して、行政の発議によるZy.行政・推進委員調整型の協議が行われた。さらに、8回の会議では、歩道舗装においてXy.MA中心型の調整が行われた。以後、9回の会議では、7件の討議のうち、推進議員の発議に対するYz.推進委員・行政調整型の協議が露店で行われ(1件)、Yx.推進委員・MA調整型の協議が、施設物やサインで行われた(2件)。また、Y.推進委員内部調整型の協議が建築物であった(1件)。一方、MAの発議に対する協議は3件で、Xyz.MA媒介型の協議が広場と歩道舗装に関して行われ、Xy.MA中心型の協議が街路樹であった。

続いて、第3段階のマスタープラン変更及び承認段階では、10回の歩道舗装に関して、推進委員の発議に対するYz.推進委員・行政調整型の協議があった。以降、11回の会議では、2件の討議のうち、街路樹に関して、行政の発議の開始でZy.行政・推進委員調整型の協議が、横断歩道では、推進議員の発議に対するYz.推進委員・行政調整型の協議が行われた。12回の会議では、5件の討議のうち、行政の発議による協議が、歩道舗装でZx.行政中心型で行い、他の4件は推進委員の発議により、Yz.推進委員・行政調整型の協議が街路樹と建築物であった(2件)。横断歩道はY.推進委員内部調整型の協議が、施設物では、Yx.推進委員・MA調整型の協議が行われた(1件)。

最後に、第4段階のマスタープランの完成段階では、2件の討議が推進委員の発議の開始で行われ、15回の施設物やサインに関してYz.推進委員・行政調整型の協議が行われた。

5-4. マスタープランの策定に向けた主体間関係の特性

マスタープランの策定段階における計画内容毎の討議のダイアグラムを積み重ねて、主体間の関係を見ると、以下のように整理できる。

露店の場合、第1段階の4回の会議では、公務員を中心に行われた議論が、以降6回の会議では、MAと公務員が主に意見交換する方式で進められ、第2段階の9回の会議では、専門家に対する市民と公務員の意見交換と商人に対する公務員の意見提示で合意に達した。

広場において、第1段階の6回の会議では、MAを中心に協議が行われ、以後の第2段階の9回の会議では、MAに対する専門家と行政の意見交換を通じて合意に達した。

歩道舗装の場合、第1段階の6回の会議では、MAを中心に行われた協議が、第2段階の7回の会議では、専門家と公務員がMAと行政との間で意見を交換する方式で行われた。続いて、8回の会議では、MAを中心に意見提示や確認が行われ、その後に9回の会議では、MAに対して、専門家と行政が主に確認を行った。第3段階に10回の会議では、推進委員の公務員を中心に意見が収容され、以後、12回の会議では、MAが行政に意見を提示して合意に到達した。

街路樹において、第1段階の6回の会議では、MAに対する推進委員の意見提示が行われ、第2段階の7回の会議では、行政を中心に意見提示と確認が行われた。続いて、9回の会議では、再びMAを中心に協議が行われた。第3段階の11回の会議では、専門家に対する意見提示と意見交換が主に行われ、12回の会議は公務員を中

心に意見が収容されて協議がまとめられた。

横断歩道の場合、第1段階の6回の会議では、公務員を中心に協議が行われ、以後、第3段階の11回の会議では、主に専門家が意見を受け入れ、市民が意見を提示して合意がなされた。以降、12回の会議は再び専門家と市民が行政に意見提示や確認を行って、協議がまとめられた。

施設物において、第1段階の6回会議では、専門家がMAに意見を提示する方式で行われ、第2段階の9回の会議では、MAが専門家に意見を提示し、確認して協議が行われた。第3段階の12回の会議では、専門家を中心に意見が提示され、計画の一部が合意に至って、第4段階の15回の会議では、専門家を中心に意見が集約され、施設物の一部の要素が合意された。

サインは、第1段階の6回の会議で、MAと専門家の意見交換を通じて協議が行われ、第2段階の9回の会議では、MAに意見を提示し、確認する方式で協議が行われた。以後の第4段階の15回の会議では、専門家を中心に協議が行われ、一部の計画が合意に達した。

建築物において、第9回の会議で、行政が専門家に意見を提示し、専門家と確認を通じて協議を行い、以後の第3段階の12回の会議では、商人に対して公務員と、行政が意見を提示して合意がなされた。

5-5. 協議の可視化によるプロセスの総括

マスタープランの策定段階における計画毎の協議内容を可視化したことで、マスタープランの策定に向けた議論過程が明らかになった。

第一に、整備事業構想段階ではMAの提案に、各人が意見を提示する方式で協議が行われ、その後マスタープラン検討及び一部承認段階ではMAが媒介になって関係主体らと意見交換や確認を行った。マスタープラン変更及び承認段階ではMAが推進委員に意見を提示することで協議が行われた。

第二に、各設計対象の主要論点に関する討議の模式化を基に、MAの発議による協議は2つの類型に、推進委員の発議による協議は4つの類型に、行政の発議による協議は2つに類型化された。

第三に、整備事業構想段階では、MAが中心になって議論が広がり、それから徐々にMAと各協議主体が設計内容に応じて、密な議論が行われ、一部のマスタープランが承認され、マスタープラン変更及び完成段階では推進委員同士と行政の間での議論になって合意に至った。

第四に、露店は公務員と商人に対する協議を通じて、歩道舗装はMAと公務員に対する協議を通じて合意がなされ、街路樹は行政と専門家に対する議論を行い、合意に達した。横断歩道は公務員に対する協議を行い、その他に広場、施設物、サインはMAや専門家の協議を通じて、建築物は公務員による協議を進め、合意に至ったことが分かった。

第五に、最も長い時間協議が継続された歩道舗装の場合、推進委員の公務員が主導的に、MAとやり取りし、他の関係者の意見を求めて、舗装材料の変更が議決された。これで推進委員内部の公務員が、街路整備事業の推進と変更に大変な影響を及ぼしたことが分かった。

東城路公共デザイン改善事業の計画内容							
段階	露店	広場	歩道舗装	街路樹	横断歩道	施設物	サイン
第1段階	露店の撤去 4回/③-Yz						
	公営露店 6回/①-A~Xyz	広場計画 6回/③-B~Xy	舗装計画 6回/③-C/④-D/①-A~Xyz	造園計画 6回/③-C~Xy	横断歩道設置 6回/①-A~Yxz	施設物計画 6回/①-A~Xy	サイン計画 6回/③-C~Xy
第2段階			舗装材料 7回/④-D/⑤-E~Yxz	街路樹植栽 7回/③-B~Zy			
			舗装材料 8回/④-D/⑤-E~Xy				
第3段階	露店の撤去 9回/③-B~Yz	広場計画 9回/③-B~Xyz	合成木材デッキ計画 舗装材料及びデザイン 9回/③-C/④-D~Xyz	樹種選定 9回/③-C~Xy		施設物計画 9回/③-B~Yx	サイン計画 9回/③-C~Yx
	露店整理	イベント広場追加造成					トンジャンデタワー 9回/③-B~Y
第4段階			舗装材料変更 10回/④-D~Yz				
			材料の代替及びデザイン変更	樹種選定 11回/③-C~Zy	横断歩道設置 11回/③-B~Yz		
第5段階			舗装材料及びデザイン 12回/③-C~Zx	ユリノ木決定 樹種提案要請 12回/③-B~Yz	実施設計図面に表示 横断歩道実行 12回/③-B~Y	照明計画 12回/③-C~Yx	トンジャンデタワー 12回/③-C~Yz
			舗装材料及びデザイン承認	MAは提案樹種提示	図面には表示、執行は追後協議	MAは照明計画の提案を提示	MAは観光文化センタを包含デザインを提示
第6段階						ゴミ箱設置問題 15回/③-B~Yz	禁煙街サイン追加設置 15回/③-B~Yz
						ゴミ箱減らすこと	禁煙街サインの追加

凡例) 【討議の模式化要素】

会議-調整項目-協議のタイプ

推進委員
商入
専門家
市民
公務員
行政

議決事項
協議事項

主要論点 【協議のタイプ】

MAの発議に対する協議
Xy:MA中心型、Xyz:MA媒介型
(推進委の発議に対する協議)
Yxz:推進委員媒介型、Yx:推進委員・MA調整型
Yz:推進委員・行政調整型、Y:推進委員内部の調整型
(行政の発議に対する協議)
Zx:行政中心型、Zy:行政・推進委員調整型

【協議主体】

X. MA
Y. 推進委員
Z. 行政
注) X、Y、Zは各討議の発議者を
x、y、z は他の協議主体を示す。

【調整行為】

① コンセプト
② 空間構成
③ デザイン
④ 材料
⑤ 構造・性能

同意
反対
提示
確認

図8 計画内容毎の議論展開過程

6. まとめ

本研究は、街路環境整備事業のマスタープランの策定に向けた協議過程の可視化を行い、合意形成のための協議の類型と主体間の相互関係を解明する方法を提示し、具体的な事例の分析を通してその有効性を示した。

すなわち、会議録のコーディングに基づいた、設計対象別の協議内容により、先行話者と後続話者の調整行為とその方向を可視化して集約した討議の模式化を行い、街路環境整備事業のマスタープラン策定に向けた協議主体間の対応と相互関係が表現できた。

最後に、本研究で示した協議過程の分析と可視化の方法の活用に関して付言する。本研究で示した議論分析と可視化の方法は、街路環境整備事業等の公共空間整備において、最終的な合意形成を共通理解し事業にフィードバックするとともに、その進行過程において、関係主体による議論の過程を共有し、相互調整を図るためにも有効であると考えられる。また、公共空間整備事業の進行過程で起こる問題を事前に予測し、合意形成を支援するツールとしての可能性が考えられる。

謝辞

本研究を行うにあたり、早稲田大学の佐藤滋先生の指導を頂きました。記して感謝の意を表します。

注

- 注 1) 韓国は、既存の都市及び住居環境整備法（2003 年）や都市再整備促進のための特別法（2007 年）の限界を克服し、体系的な都市再生支援のため、都市再生活活性化及び支援に関する特別法が 2013 年 6 月に制定された。
- 注 2) 東城路公共デザイン改善事業におけるマスタープランとは、事業の設計とその後の付属物を含めて、街路計画全体を決める方針を示し、基本計画と実施設計が含まれている。本研究では、設計案の策定までを対象とする。
- 注 3) マスタープランを計画する MA が地域の縁故がない外部専門家であったため、実務委員会はこの点を補完するために、推進委員の構成員の中から、専門家と公務員、商店街の住民代表で構成された組織である。MA を助けて現場で発生した問題を調整し、事業推進を実行していく役を務めた。
- 注 4) 2008 年、大韓民国公共デザインエキスポの優秀賞受賞。2012 年、第 2 回大韓民国景観大賞の市街地景観最優秀賞。
- 注 5) 事業範囲は、大邱広域市中区東城路一帯(大字ビル〜韓一劇場〜大邱デパート〜中央治安センター)である。・1 次区間：大字ビル前〜東城 5 街入口、約 790m(長さ)×12m(幅)。・2 次区間：東城 5 街入口〜中央治安センター、約 110m(長さ)×12m(幅)。マップの出典は 2008 年 6 月 2 日の東城路マスタープランの報告書、概要による。
- 注 6) 推進委員に所属された公務員は、文化体育観光部、大邱広域市、大邱市中区の各代表 3 人で、議決権を持った者である。
- 注 7) 東城路公共デザイン改善事業報告書の課業遂行及び構成の中で、関係機関別マスタープランの協議及び調整の推進組織図による。参考文献 7) の pp.10、また参考文献 8) pp.212 の事業参与主体の関係構図による。
- 注 8) 推進委員会の会議録は、推進委員会の実質的な運営を助ける東城路公共デザイン改善事業の事務局の事務局長と幹事が推進委員会に出席し、現場で会議の内容を記録した。本論で扱っている会議録は、要約筆記として、推進委員会の回ごとに開催日時、場所、参加者、主要会議の内容が記載されている。
- 注 9) 3 章は参考文献 7) pp.12-19、推進委員会の会議録と推進委員会の議決事項を参照。
- 注 10) 街路整備事業に先立ち、街路を不法占拠していた露店を撤去し、歩行空間を確保した。この過程で露店商人と行政(中区庁)の葛藤が発生し、露店の取り壊しによる露店の生存権保障のデモが行われた。このような問題を解決するために、行政は合法露店を推進し、東城路の生計型露店対象者選定のための審議委員会を開催し、生計型露店に対して代替場所の提供と露店ブースデザインを行い、問題を解決した。事業推進過程の実際は、推進委員会の会議内容報告書及び通知書、参考文献 5) の pp.151-152、東城

路公共デザイン改善事業報告書の参考文献 7) pp.12-19、参考文献 8) の pp.211 を再構成した。

- 注 11) 質的データは文字テキストを代表とし、人びとの行為や語りに含まれている意味の世界を再現する。質的データ分析は単にコーディングによってデータの縮約をおこなうだけでなく、その一方で、何度となくオリジナルの文脈に立ち帰り、それを参照しながら行為や語りの意味を明らかにする。参考文献 9) の p.18、p.57。
- 注 12) 北尾は設計の定義から調整対象の内容を分析する指標として「理念」、「機能・性能」、「空間」、「形態」、「素材」、「その他」の 6 つの調整項目に分類した。調整項目は文献 11) を参照し、名称を付けた。
- 注 13) 計画内容の中で北将台マダン舞台、新東将台タワー、街博物館、噴水は実行できなかった。しかし横断歩道は議論をした後にすぐ実行されず、長期間の議論を続け、2013 年 3 月に設置された。
- 注 14) 既往研究は参考文献 3)、10) を参照。
- 注 15) 談話セグメントとは、談話中のまとまりである。本論では、談話の背景にある目的に基づいて談話セグメントを定義する。談話セグメントを談話内の発言や文を用いた行為ととらえる点の特徴である。参考文献 13) の pp.95。
- 注 16) 東城路公共デザイン改善事業に選定された時期に行政自治部（韓国の中央行政署）の看板整備モデル事業の対象にも選定され、事業間の連携のための看板推進委員 2 人を推進委員会として迎え入れた。しかし、推進委員会議での 2 名のうちもう一人の発言は発見されなかったので本分析では一人だけを含む。
- 注 17) ・討議：ある問題について検討し、協議する。・協議：関係者が個別にあるいは全体で話し合いを行いながら、集団としての総意を導き出す非定型的な合意形成の方式。・発意：意見を出す行為。・発議：会議で討議する議案(=提案)を出すこと。

参考文献

- 1) 高見沢実編著：都市計画の理論、(株)学芸出版社、pp.267-268、2006.1
- 2) 北尾靖雅、内井昭蔵、宗本順三：マスターアーキテクト方式によるキャンパスデザインの合意形成の研究、日本建築学会計画系論文集、第 515 号、pp.165-172、1999.1
- 3) 服部邦比古、阿部浩和：民間都市再生事業の都市計画決定段階における官民の合意形成に関する考察、日本建築学会計画系論文集、第 679 号、pp.2109-2117、2012.9
- 4) 島田昭仁、小泉秀樹：まちづくり小集団の討議過程の分析手法に関する研究について、日本都市計画学会 都市計画論文集、Vol.48、No.3、pp.249-254、2013.10
- 5) Lee Yoon-kyung: Status of Judgment and Improvement Proposal of Public Design Model City, Report of the Ministry of Culture & Tourism, pp.6-9、2011.10
- 6) Lee Jeong-ho: The Culture Industry Needed Understanding that the Process is important as much as the Result, Architectural Institute of Korea, Vol.53, No.5, pp.28-32、2009.05
- 7) Dongseongno Public Design Improvement Project Report, pp.22-23、2008.8
- 8) Lee Jeong-ho, Kim Ju-Hyun, Kim Sang-hee: Analysis of Public Street Project Cases From the Viewpoint of Modern Publicness, Journal of Architectural Institute of Korea, Vol.28, No.11, pp.207-218、2012.11
- 9) 佐藤郁哉：質的データ分析法、(株)新曜社、p.56、2011.09
- 10) 北尾靖雅、内井昭蔵、宗本順三：マスターアーキテクト方式によるニュータウンの協働設計手法の研究、日本建築学会計画系論文集、第 512 号、pp.183-190、1998.10
- 11) 日本建築学会編：建築学会用語辞典、岩波書店、pp.171-499、1993.12
- 12) 久保推：言語行為と調整理論、(株)ひつじ書房、pp.178-182、2014.02
- 13) 坊農真弓、高梨克也：多人数インタラクションの分析手法、(株)ホーム社、p.95、2009.9

A METHOD FOR THE VISUALIZATION OF THE DELIBERATIVE PROCESS IN URBAN ENVIRONMENT IMPROVEMENT PROJECT

Focused on the Dongseong-ro public design improvement project in Dae-gu, Korea

Songyi JEON*

* Doctoral Course, Grad. Student, Dept. of Architecture, Faculty of Science and Eng., Waseda Univ.

The present study develops a new methodology to visualize the interactions between stakeholders during consensus building processes. The research takes as an example the urban environment improvement master plan consultation process for a commercial street in Dongseong-ro, Dae-gu city, Korea and, based on qualitative coding analysis of the project discussion proceedings, clarifies:

1. The priority and importance of each discussion topic.
2. The various natures of the interactions between participants.
3. The changing roles of each participant along the process.

On that purpose, firstly, the whole proceedings of the project meetings that took place a total of 15 times from July 16, 2007 to April 3, 2009 were studied. The project was divided in 4 stages: Master Plan image, First project design check, Further corrections, and finally, last comments and common agreement.

Secondly, inside each project phase, discussions were classified according to speaker (Master Architect (MA), Expert, Government, heads Citizens, Local Merchants and Government officers), topic of each comment (street features and area aesthetics) and position of the speaker and reactions of other participants (8 types). Based on this points a new methodology for objective visualization of the discussion process was developed.

Finally based on this method, the whole consensus building process was defined and the main points of the discussion and idea adjustments were clarified.

As a result, the following points were clarified:

1. Concerning the evolution of the discussion topics, the research proved that the dimension of the discussion changes. In the first stages, larger issues related to the urban space (plaza, street, etc.) are the center of attention, and gradually the discussion turns to physical elements (trees, street furniture, etc.).
2. In terms of participation during the discussions, the MA is more present and active during the first two design proposal stages. Community groups show more commitment during the project check and modification phases. Governmental officers show more interest in the implementation of the project and during the last stage they try to verify the process with the technicians.
3. With regard to the key roles in the discussion, the leader position changes along the course of discussions: the MA holds the leading position in the initial stages, but then takes the role of coordinator in the last phases of the project.

Finally, this new visualization methodology could be used in other different cases as a tool to evaluate the weak/strong points of past consultation processes. Besides, it can also be useful to anticipate conflict in similar participatory projects.

(2016 年 10 月 10 日原稿受理, 2017 年 4 月 24 日採用決定)